様式８の１の２　別紙２

論文審査結果の要旨

専攻名　　システム創成工学専攻
氏　名　　松 浦 達 也

本論文は、「建物のコモンスペースの配列からみた現代日本の大学キャンパスの公開性に関する研究」と題し、一般利用される建物の配置、コモンスペースの配列からみた連結された建物群、および多目的に利用されるコモンスペースを中心とする室配列という３つの視点をもとに、各々の空間構成からみた大学キャンパスの公開性を明らかにするものである。

これまで、大学キャンパスにおける建物のコモンスペースに関する研究には、大学図書館などの特定の建物（ビルディングタイプ）の整備課題を検討するものがあり、大学キャンパスの複数の建物の関係に関する研究には、ポルティコなどの特定の建築形式や、建物群の平面形態の特徴を捉えるもの、さらに大学キャンパスの形成過程に関する研究には、キャンパスの立地の変化を分析するもの、マスターアーキテクトが存在する大学キャンパスの設計プロセスを分析するものがみられるが、現代日本の大学キャンパスにおける建物のコモンスペースの全体像を捉えて、その空間的側面や通時的な過程を検討するものはない。

そこで、本論文では、現代日本の大学キャンパスを対象に、建物のコモンスペースの配列に着目して、その典型的な構成としての類型を抽出し、それらを比較検討することで公開性の性格を明らかにし、さらに、建物の建設年代から社会情勢や大学教育の情勢を踏まえた形成過程を検討することで、公開性の通時的傾向を明らかにするものであり、そこに独自性があると認められる。

「一般利用建物の配置からみた大学キャンパスの公開性」については、学外利用による門の公開と、学内利用を主とするキャンパス中央の公開の２つの構成を基本として、それらの複合による門からキャンパス中央の段階的な公開といった建物の公開度と配置による大学キャンパスの公開性の性格を見出している。

「コモンスペースの配列からみた連結建物群の公開性」については、全ての建物のコモンスペースが連結された内部一体的な公開や、テラスなどの外部要素の連結を含めた内外一体的な公開、一部の建物がコモンスペースをもつエントランスの公開など、連結する要素とコモンスペースの配列から連結建物群の公開性の性格を見出している。

「学内多目的コモンスペースを中心とする室配列からみた建物の公開性」については、複合化した学内多目的コモンスペースが広場まで連続する段階的な公開と、他の室と接続する単体のコモンスペースが反復する建物内部の公開、その両者を併せ持つ複合的な公開といった、学内向けの多目的利用されるコモンスペースを中心とする室配列から建物の公開性の性格を見出している。

「大学キャンパスの公開性の形成過程と今後のキャンパス整備に関する考察」については、これまでの３つの視点から各々の形成過程を検討することで、大学キャンパスの公開性の通時的傾

向を見出し、得られた類型や形成過程の傾向から今後のキャンパス整備を考察している。

以上の成果は、今後のキャンパス整備において、これまでの動向と現状を踏まえた上での新たな建物の整備や、既存建物の一般利用への活用による大学キャンパスの公開性を構想する際の認識の基盤として有意義なものであると評価される。

本論文については、平成29年2月15日に本学アカデミアホールにおいて、審査委員全員および学内外の当該分野の研究者等の出席のもとに公聴会が開催され、研究成果の発表と質疑が行われた。公聴会のあとの学位審査委員会において、本論文の内容を詳細に検討した。その結果、本研究により、建物のコモンスペースの配列で形成される階層化や一体化という現代日本の大学キャンパスの公開性についての新たな知見が得られたことが認められた。さらに、本研究は工学的に価値があり、研究内容の学術レベル及び研究の独創性・実践性において優れていると判断した。よって、本論文は博士（工学）の学位論文に値するものと認める。